

磐城高校とは その3

磐城高校から離れるときが刻一刻と近づいてくる。しかし、しみりと昔を思い出しながら積み上げていった時の中の様々なことを振り返るような雰囲気はない。郷愁に浸っている暇がない。やらなければならないことで忙殺されている。明日も、福島県教育センターに初任者研修の締めくくりとしての講話をするために出かけなければならない。何を話すのか決めなければならない。その原稿を作って持たなければならない。

だから、離任式が、3月30日に決まったところで、何を話すかはもう決めた。「I will be back.」について話そうと思う。ターミネーターのシュワルツネッガーの最後のセリフである。

私は、欲張りなので、この学校から完全に離れることはできない。この学校でもある。どの学校からも、離れることができない。教員からも離れることができない。フランスからポルトガルに行くはずであったが、行く暇とお金がない。その暇があるなら、生徒たちと新しいことに挑戦していきたい。休日など、じっと家にいることができない。じっとしているとそわそわしだして、母親が、「今日も学校に行くのか」と云ったらすぐに、「これから行ってくる」になる。畑を耕し、田んぼの草刈りをするにしても1時間もあれば終わる。作物を取るのも10分もあれば事足りる。あとは学校に行って、いろいろな生徒と話す。その子供のことに関われば5時間ぐらいはすぐに時間が過ぎる。今だと、受験生が来ているときは、ああでもないこうでもないに関わるうちに1日はすぐに過ぎていってしまう。

関わることからすべてが始まっていき、到達点に向けて試みは展開し、時間が足りなくなるほど深く関わることになる。これが合格につながるとこたえられない。生徒が喜ぶ。その笑顔がたまらない。

こうやって37年の月日を過ごしてきたので、もはや変えることができない。時々同じ匂いを持つ教員に合うと、やたら敵愾心を燃やすことになる。「昨日は何時まで教えたのか」と聞くと、夜の8時だという。「嘘をつくなよ」といっても、教員も生徒も示し合わせて8時だという。時には日が代わっていたことも知っている。「ずるい」と思う。俺にも教えさせてくれと思う。

昔、男子高時代だったが、24時間課外というのを決行し、百年記念館で、3日ぐらつぶっ通しで勉強した覚えがある。米を30キロもってきて、焼きおにぎりにしてもらって、それにばくつきながら、24時間×3の勉強をしたことがある。ふらふらになりながらも、充実した思いがあり、病みつきになる。(続く)